

# 景観フォーラム

## 巻頭言

<会報第21号巻頭言>

桜咲く春が到来しました。花といえば桜のことで、日本人にとって、ピンク色の桜が満開の先に白く雪が輝く富士山を望めるという風景に何とも言えぬ“平和”を感じざるを得ません。このところ、その平和をかき乱す事件が相次いでおりますが、その平和を壊そうとしている輩にとって平和を感じない風景とはどんなものか、と問いかけてみたいものです。

さて、東京駅に、近い将来、大阪の“あべのハルカス”（地上60階建て、高さ300m）を超す日本一高い超高層ビル建設の計画が発表されました。恐らく2020年の東京オリンピックに間に合わせ、世界中の人々を圧倒させるということではないかと思いますが、このような思いつきが未だに国家事業としてまかり通ることに辟易しているのは私ひとりのみでしょうか。このような思考スタイルによる行動は、未だに欧米諸国への劣等感の裏返しとしか思えません。今、神奈川近代文学館で「100年目に会おう」と銘打ち“夏目漱石展”が始まりましたが、漱石はその出来上がった超高層ビルを見て、一言も発せず、恐らくただ深い溜息でもするのではないのでしょうか。もし、発するとしたら、「そろそろ量より質を考えてみたらどうかね！」と言うのではないのでしょうか。

今年度、日本景観フォーラムでは、近代化途上にある国々の景観を考えてみたいと思います。そのためには例えばアフリカ諸国の日本にある大使館を通じて、景観とコミュニティについて映像を用いてお話を拝聴するという機会を持ちたいと考えております。以上のような勉強を通じて、近代化と景観との関係、日本にとっての景観と近代化との関係などを考えてみたいと思います。下記に、おおよその今年度の計画を記載しておりますので、皆様の積極的な参画をお願い申し上げます。（日本景観フォーラム理事長 斉藤全彦）

### <日本景観フォーラム2016年度\*（平成28年度）年間スケジュール>

#### 2016年

- 4月 8日（土）景観セミナー：2月19日（金）戸谷先生によるセミナーの第2回目 於JICA研究所
- 4月27日（水）理事会・総会 於JICA研究所
- 5月18日（水）景観評価基準作成委員会 於飯田橋オフィス
- 6月22日（水）景観セミナー：土岐寛先生『日本人の景観認識と景観政策』 於JICA 201AB
- 7月 2日（土）景観まちあるき：東京都練馬区（御担当：豊村さん）
- 8月 夏休み（景観研究自由参加）
- 9月14日（水）景観セミナー：日本ナショナル・トラスト 於未定\*\*
- 10月15日（土）景観まちあるき：東京都世田谷区（御担当：東海林さん）
- 10月26日（水）第2回理事会 於JICA研究所
- 11月16日（水）景観セミナー：街並みの構造 講師高山さん 於未定
- 12月14日（水）忘年会

#### 2017年

- 1月18日（水）景観セミナー：ミャンマーの景観とコミュニティ 於JICA研究所
- 2月15日（水）2016年度：景観まちづくり活動のまとめと来年度への提言 於未定
- 3月 春休み（運営委員会開催予定）

\*2016年度とは2016年4月1日⇒2017年3月31日のことです。

\*\*今年度からJICA研究所のセミナールームはJICAが関わる発展途上国（約160カ国）との国際交流に関係するセミナーのみ利用可となりました。尚、3月中旬のJICA側からの要請でしたので、6月までの予定事項については利用可能にしてもらいました。また、理事会・総会については現在通り利用可とされました。

映画『もしも建物が話せたら（原題：Cathedrals of Culture 文化の大聖堂）』を鑑賞して  
 ヴィム・ヴェンダース製作総指揮 2014年

<メッセージ>「もし建物が話せたら、私たちにどのような言葉を語り掛けるのだろうか。建物は文化を反映しており、社会を映し出している鏡でもある。一昔前、欧米ではその街を代表する建物は教会であり、教会を見ることによってその街の文化も人々の暮らしも垣間見えた。現代におけるその街を象徴する建物とは？世界の名監督6人がそれぞれの街で人々と思いを共有する、思い出の詰まった文化的建物のストーリーを描きだす。」

6人の監督が6つの建物を紹介しながら、人々がその建物とどのように関わりを持ってきたのかを建物自身が語り聞かせるという手法の映画である。まず、ヴィム・ヴェンダース監督による“ベルリン・フィルハーモニー”（ドイツ）。五角形のホールが印象的な、2013年に50周年を迎えたとは思えないほど現代的感覚を備えた文化の中心的建物。次に、ロバート・レッドフォード監督の“ソーク研究所”（アメリカ）。建物と建物の間に大きく開いた天空が素晴らしい。そしてそこで研究者が孤独に陥らないようなコミュニケーションを大事にする工夫した空間構成が憎い。そして、放射性物質最終処分地の問題を扱った『10万年後の安全』の監督マイケル・マドセンによる“ハルデン刑務所”（ノルウェー）。再犯率がヨーロッパで最も低いノルウェー。世界一人道的だと言われるこのハルデン刑務所は懲罰よりも更生・社会復帰を目的としている。次に、古色蒼然とした“ロシア国立図書館”（ロシア・サンクトペルグ）を読書愛を持って紹介するのはミハエル・グラウガー監督。ロシアで発行された印刷物は何でも揃うロシア最古の公共図書館。数えきれないほど並ぶ緑の電灯は実に印象的で美しい。さて、人口

500万人にも満たないノルウェーという国で何故このようなシンプルで素晴らしい建物が生まれるのだろうか。“オスロ・オペラハウス”を監督したマルグレート・オリン女史は、王国でありながら一人ひとりの人民を大事にしてきた何かをこの建物から感じられる思いを建物自身に語らせている。最後に、フランス・パリの“ポンピドー・センター”である。まるで一目見た外観は何かの工場を連想させる建物だが、見方によっては現代芸術作品の中に入ってしまったような錯覚をもたらす建物である。現代芸術を後押しした大統領ジョルジュ・ポンピドーが発案した総合文化会館ということでも、政治が文化を後押ししている姿をかいま見ることが出来る。

以上の6つの建物が自らを語り、人々が末永く建物を生活の場に取り込み、そして建物がそこに生きる人々を愛しているという絵柄が見え隠れする。建物は単に人間生活の機能を提供するものではあるが、欧米の建物にはそこに人間の温かみというものがさりげなく表現されているのはなんと心憎いことか。翻って、極東に住む我々日本人として、日本の建物をここに提示するとしたら、果てどれにしたらよいだろうか。どの建物が自らを語ってくれるだろうか。（小渕 潤）



迎賓館の中庭

500万人にも



## &lt;LFJブックレビュー48&gt;

『ニッポン景観論』アレックス・カー著 集英社新書 2014年刊

景観はその場に関わる諸々のコミュニティの文化と文明の所産であるとするなら、その文化と文明を客観的に評価するときは、その場のコミュニティ以外の目で見ることがある。そういう意味で、所謂、外人の目を見た日本の景観はどう映っているかを考える場合、このアレックス・カーの景観論は格好の実験場であるといえよう。

周知のように、1952年米国生まれではあるが、「アメリカ海軍の弁護士を務めていた父に伴って、12歳から2年間、横浜の米軍基地で暮らしました。その後、アメリカのイェール大学で日本文化を、東京の慶応義塾大学で日本語を、イギリスのオックスフォード大学で中国語を学び、77年に大学を卒業し、就職で日本に戻ってきました。」というように、生粋の親日家であり、ある意味で、日本の景観を論ずる場合、日本人よりも客観的な鑑識眼を保持している人ではないだろうか。

彼は、この景観論で開口一番日本人には当たり前になっている景観、即ち、電信柱、電線、鉄塔の乱雑な拡散について言及する。彼の日本での活動の拠点は日本人が誇らしげに外人に語る京都である。彼の目に入る景観は京都を念頭にしながら日本の景観について論じているわけだが、日本人が持っている神話なるものを指摘する。神話

(1) 電線を埋設する工事費が高いため、特殊な地域以外は財政的に無理。神話 (2) 日本は地震国なので電線は埋設できない。次に看板と広告について。神話 (3) 看板が多ければ多いほど、経済効率が上がる。(4) 看板で細かく誘導しないと、お客さんは戸惑ってしまう。以上これらの4つの神話は彼によって見事に覆される。

次に、「コンクリートの前衛芸術」と銘打ち日本の公共事業が、いかに日本の景観を無様に破壊してきたかを指摘し、また「人をびっくりさせるものを作る力」として、その場と地域に全くそぐわない建築物が乱立する状況を示し、そして「ピカピカの“工業モード”」なるものが日本の明治維新以来の近代思想として席巻しているのが未だ止まない現象を景観に見る。これは何故止まないのだろうか、と問うてみれば「古いものは恥ずかしい」とい考え方にに基づき、京都駅前に建つ京都タワーと今現在デンと構える京都駅についてその成り立ちを論ずる。

この景観論は、恐らく日本人には決して語れなかったし、今後も語れることはないであろう日本の景観について根源的な問いかけとなっている。彼はこれらの指摘をした後、良き景観創造のためのアクションプランを提示する。まず第一に、「小手先の規制で、本当に大事なことを失う」ことになり、景観先進諸外国のゾーニング事例を学ぶことを例示する。そして文明開化から続く「“混沌こそアジア”という自己嫌悪の思い込み」は捨て、早く「国土の大掃除」を実施すべきではないかと呼び掛ける。

21世紀の日本が観光産業に立脚することは明白であり、“景観テクノロジー”の活躍がこれからの日本の行く末を担うのは必定ではないかと思われる。(斉藤全彦)





## 天地玄黄 ⑨「上高地」

去年の夏に、ずっと行きたかった長野県の飛騨山脈南部の上高地へと行ってきました。早朝からの観光を計画していたため、夜に出発し平湯温泉近くの駐車場へ止めて朝5時まで仮眠。

上高地は景観保護の為、マイカー規制が行われている為、ここからはタクシーかバスでの移動になるのですが、今回はタクシーを選びました。片道3000円で距離を考えると結構お得でした。

上高地に着き次第、大正池からのスタートです。朝霧が掛かっている大正池でいきなり感動！この朝霧を見るために朝5時に起き出発したのですが、その甲斐がありました。その後は田代湿原、田代池と歩いて行きましたが早朝ということもあり、夏場ですが涼しく、また鳥の鳴き声も沢山聞こえるので気分良く散策することができました。続いて河童橋に着き、この景観も素晴らしく写真で撮影しました。特に穂高連峰の眺めは夏場も大変よろしいのですが、紅葉の秋や雪の積もる冬に行けば更に良い景色になるものと実感しました。眺めを堪能したら梓川岸を歩き明神池行き散策は終わりです。歩いているとお猿さんが遊歩道の上で普通にくつろいでいてびっくりしました。

上高地は青々とした青空と透き通った水の組み合わせがとにかく美しかったです。普段、せわしない都会でせかせかと過ごしているからこそ、たまにはこういう場所に行くと色々と浄化されます！（木津雅史）



朝霧がかかった早朝の大正池



穂高連峰



〒150-0031

東京都渋谷区桜丘町14-5-502

TEL : 03(3780)3814

FAX : 03(6379)6681

E-mail : info@keikan-forum.com

URL : <http://www.keikan-forum.org>



Landscape Forum of Japan